



《安全管理》 肺血栓塞栓症予防管理料算定率

<項目解説>

肺血栓塞栓症は血栓(血のかたまり)が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こす疾患であり、程度によっては死に至る場合もあります。長期臥床や骨盤部の手術後に発症することが多く、エコノミークラス症候群も肺塞栓症の一種ですが、入院中においては適切な診療によりかなりの部分が予防可能で、リスクレベルに応じた予防法（弾性ストッキングまたは間歇的空気圧迫法等）が推奨されており、発生率の低下への取り組みを行っています。

本指標により、肺血栓塞栓症予防に対する病院全体の取り組みを評価します。

<当院の実績>

【平成24年度】	15.7%
【平成25年度】	10.4%
【平成26年度】	9.3%

<当院の自己点検評価>

発症の危険が小さい低リスクの場合は手術後なるべく早くベッドを離れて歩いたり、運動したりすることが基本となりますが、中リスク以上では、弾力のあるストッキングや空気圧でマッサージする機械を使う「間欠的空気圧迫法」と呼ばれる方法で足を圧迫し、血流が滞るのを防ぐ方法が有効とされています。

さらに発症の恐れが高い場合、血液を固まりにくくする「ヘパリン」など血液凝固防止薬を使用するなど、リスクに応じた対応を行うことにより発症率の低下に取り組んで参ります。

<定義>

肺血栓塞栓症予防管理料算定率

<算式>

分子：入院中に肺血栓塞栓症予防管理料を算定した患者数

分母：全退院患者数